ひとりごと

「逃避行」

私の社会人生活は南の島・奄美大島の小学校から始まった。何かあったときに、ちょっと逃げ場になれる存在がいいな、子どもたちにとって家族とも先生とも違う、「自分を評価しない、なんかいつも近くにいる大人」になりたいなと思って、学校事務職員、「事務の先生」を選んだ。

青い空と青い海を傍らに、聞きなれない方言と一緒に始まった社会人生活。恋の話や先生の愚痴を楽しそうに話す子や友達と喧嘩したと泣きながら訴えてくる子。生徒数100人に満たない小さな小学校だったけれど、先生方が少しでも充実した指導ができるよう、情報交換しながら、自分にできる小さいことを少しずつ見つけながら日々を過ごす。その「小さいこと」に先生や子どもたちが気づいてくれることが仕事のモチベーションになっていた。

それが、数年前から、子どもたちの声が聞こえないところで働き始めた。無機質な建物、毎日届くたくさんのメール、子どもたちの無邪気な声とは程遠い大人たちのまじめな話。

子どもたちの姿が見えなくなってから、ふとしたときに、何のために働いているんだっけ、と呆然とする。私がやる仕事って、一体何の役に立っているんだろう。あれもこれも十分にできない私に、一体何ができるんだろう…。

もともと考えすぎのきらいがあるためか、悩むというほどではないけれど、もやもやして、すっきりしない気持ちになって、全部放り投げたくなる瞬間がたまにある。そんなときの私の対処法は、わかりやすく逃避行だ。「そうだ、奄美に帰ろう」

帰ると決めたらそこからはいつも早い。夏だろうと冬だろうと、一泊だろうと滞在時間30時間未満だろうと、飛行機に乗ってしまえばもうその時点で既に半分くらいは気が済んでいる。

おかえりと言ってくれる地域の方々、毎日遊んだ海、お酒が飲めるようになった卒業生。変わったものと変わらないものに触れ、誰もいない浜辺で波音を聴きながらぼんやりしたり、初任の頃と同じように集落の人たちと笑って過ごしたりしていると、頭をつかうのが馬鹿らしくなって、わたしのもやもやは小さくなっていく。

短い逃避行の着地は大体いつも同じで、「素直でいること」「感謝をすること」。何かを成さなくては、と思うと苦しくなるけど、その時々にできることをすると決めて頑張るほうが私の性に合っていることを思い出す。ありがたいことに一緒に働くひとたちに恵まれる人生で、常に尊敬できる上司や同僚が道を示してくれる。私ひとりでは何もできないが、周囲の方々の導きで、今、初任の時は想像もしなかった日本の教育を支える場所で働いている。大都会東京で、情報の海に溺れそうになりながらも、何もできなかった私が、ちょっとずつできるようになった今までのことを心に携えて、謙虚に過ごしていきたいなと考える日々である。

(H.M)

「教育委員会月報　令和７年７月号　No.909」

文部科学省

・**発行・著作** 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
・〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
・TEL：03-5253-4111（代表）
・URL：https://www.mext.go.jp